

本物と偽物

松下昌義

まえがき

ここにまとめた文章は、私たちの集いが毎月出しております「みちしるべ誌」のコラムに記したものです。それを、この度、教友の瀬川知子さんが、美しくワープロしてくださり、それを山本哲也さんが手作り製本して、出来上がったものです。みちしるべ文庫に加えていただき感謝します。お読みくださる方々の霊の養いに少しでもお役にたてれば、ありがたいことだと思えます。

一九九五年七月十日

松下昌義

来てごらん下さい。そうしたらわかるでしょう

— ヨハネ福音書一章三九節 —

私達は、言葉や文字によってあらわされたものは真実であり、實在だと思つてしまひます。しかし、それらはときとして、事実を事実として語らず事実を言葉や文字の世界でつくりあげ、その結果、まったく事実でないものをあたかも事実であるかのように示し、思い込ませます。

このように、観念の世界でつくりあげた誤つた事実を事実とする作業を、言葉や文字は平気でするものです。

つまり、観念的にもものを見たり、考えたりしてしまふ、ということとは私達が日常なんの疑いもなくしてしまふことです。その結果「だました」とか「だまされた」などと、いろいろなトラブルが社会のいたるところでおこります。

事実より言葉が先にあると、事実が事実として見えない。いや、見てもみず、聞いても聞こえない、ということになります。

イエスさまは、事実がそれ自身語る言葉を語ることによって、事実を事実として見る知恵を下さる方があります。

「毒麦を集めようとして、麦も一緒に抜くかもしれない。収穫まで両方とも育つままにしておけ」

— マタイ福音書一三章二九節 —

本物があれば必ず偽物があります。しかし、その区別は簡単にできません。その区別を急いですると偽物を本物と思い込んだり、本物を偽物と誤って断定する愚かを犯します。

本物と偽物との区別をするには時間をゆつくりとかけて待つことが肝要です。時間をかけて待つていきますと、こちらからことさらに区別をしようとしなくても、向こう側から己の正味の姿を現してくるものです。そして必ず最後には自滅していきます。「覆いかぶさられているもので、現れて来ないものはなく、隠れているもので、知られてこないものはない」のであります。(マタイ十・二六)

また、すべては自分自身の重さで自分の身を沈め、自分の蒔いたものを自分自身が必ず刈り取ることになるのです(ガラテヤ六・七)

その結果、「滅びるものだけが滅んでいくのです」(ヨハネ一七・一二)

信じるとは、畏敬と確信をもって神の前に待ちつつ進み行くことです。これほど積極的な生き方はほかにありません。

おっしやつてください。そのことはいつ起こるのですか。また、あなたが来られて世の終わるときには、どんな徴があるのですか。イエスは答えていわれた。「人々に惑わされないようにしなさい」

— マタイ福音書二四章三節 —

「この世の終わりが〇〇年に来る。その時には××が起こる」

などと言つて騒ぎたてている宗教があり、それに類する人々がいます。そして、結構、多くの人々が興味本位で関心をいただき、何かことあるごとに、話題として持ち出します。

その他にも、未知なる事柄について「言い当てた」とか「当てない」とか言つて人々がそれに群がったり、去つたりする現象が宗教とか、その類の集団で起こっています。

こんな人々が世の中には多くいて、いつも西に走り、東に走り、北に群がり、南へさ迷う。そのような人々はこの世だけに目を向け、そこで起こる一つ一つの出来事に自分の欲を絡ませ好奇心に振り回され、うろろうして最後に虚しく人生を終わるのです。

この世が、何時どのようなようになってかまわれないような自分の生き方を、自分に持つことが大切なのです。イエスはそのような命を、私達に下さる方でありませう。

。遊むに遊ぶものは有る。イヨハネ二、一五〜一七
。神の人に心を遣はるる心も有る。ヨハネ三、一三

イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行くこととして、のを知り、ひとりでもまた山に退かれた。

— ヨハネ福音書六章十五節 —

さまざまなイエスの不思議な業を見た民衆は、この人を自分たちの政治的な指導者になつて戴こうと考えた。しかし、イエスは、ひとり山に退かれた。

なぜイエスは民衆の王にならなかったのでしょうか。

ここで、イエスが政治を否定なさつたと考えるのは軽薄過ぎるでしょう。

経済や法的なことを含めた政治か宗教か、という対立的な考えはイエスにはなかつたように思います。

イエスは政治も経済も法もその他一切が、神の見えない恵みの働きに基づいて現れる事柄でなければならず、そのような政治であるところに、政治の本当の姿があるとみておいてはなかつたのだと思います。

政治は人間社会にとって不可欠ですが、善い政治とその努力とは人間自身が、神の支配に目覚める時に同時にそれは自ずと現成して来るのでありましょう。イエスは神の支配に人々を目覚めさせる働きをすることが、ご自分の使命と考えておられたのです。

いつも喜びなさい。互いに励まし合いなさい。思いを一つにしなさい。平和にすごしなさい。そうすれば、愛と平安の神があなたをたと共にいてくださる。

— コリント第二の手紙十三章十一節 —

愛と平安とが漲る自分でありたいと思います。

愛と平安とが満ちる家庭でありたいと思います。

愛と平安とがただよう社会でありたいとねがいます。

愛と平安とがおおう世界でありたいとねがいます。

そのためには、愛と平安とを生み出し、推進してくださる神さまを自分の内に迎えればよいのです。

怒りと、憎しみ、利欲と傲慢の心と思いとが渦巻くところには、決して愛と平安の神は訪れてはいらつしやらないでしょう。たとえおいでになつても、愛と平安はそこでは、生み出せず、推進もできません。

喜びと、互いの励ましと、一つ心になつて進もうとする思いが働いているところには、愛と平和の神は、その絶大なる創造的な力を充分に働かせられるのです。

私達は自らを整えることから始めねばなりません。整えられた時に、神はそこでのみ、充分にその祝福を現してくださるのです。

わたしは良い羊飼いであつて、わたしの羊はまた、わたしを知っている。

— ヨハネ福音書十章十四節 —

人の生きる姿を、迷える羊のそれに見られたのはイエスさまです。

あなたは、もう、迷うことはありません。わたしは良い羊飼いです。わたしについておいでなさい。と言つて、私たちを導いてくださいます。

大切なことは、私達がその優しい呼びかけによくお応えできる心を持つことです。まこととまことと見分ける心をもつということでありませぬ。

まことなるものに感応できる心は、「まことごころ」です。まことごころとは、素直なごころ、深い意味での自然のごころです。

心の清い人は神さまを見るでしょう。そのような人は幸いな人です。とイエスさまは申されました。本当にそのとおりです。心の清い人は清いものに感応し、心が汚れていれば、その人は汚れたものに感応するでしょう。

自分の心を清くするためには、清いものに自分の心を向けることに心掛けることが大切です。これはだれにでも出来る日々の修業です。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して下さい。

— ヨハネの手紙一、四章十節 —

信仰とは神さまを見つめる事ではありません。また、自分自身を見つめることでもありません。そうではなくて、神さまに見つめられている自分を見ることであります。

神さまが慈愛をもって、このわたしを何時でも何処でも見つめて下さる、ということを見ることです。慈とは、他を自分の内に見ることです。つまり、親が子を自分のように見る心です。また、愛とは、自分を他に於いて見ることです。つまり親が子の身になつて見る心です。

このように慈愛なる神さまにいつも、どこでも見つめられているのがこの私なのだということを見て、自分自身の歩みをする。また他人や他事にかかわることが信仰の生活ということであります。

自分が神さまを礼拝する以前に先ず神さまが、自分を礼し拝して下さい。だからこそ、自分は礼拝するのであり、礼拝が出来るのです。このように神さまの慈愛の内にいる者こそ貴方なのだ、とイエスさまは示して下さいました。

信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である。

— コリント第一の手紙十三章十三節 —

愛とは、深い思いやりの心と行いであります。そのような思いやりと行いには、かならず大なり小なりの自己犠牲がともないます。

「人が友のために自分の命をささげる、これほど大いなる愛はない」とイエスさまが言われたのは愛の極致であり、思いやりの徹底した姿でありましょう。

イエスさまは、その愛の極致、思いやりを徹底なされました。それが十字架に於ける死であります。

二千年の時を過ぎた今日でも、尚、多くの人々がイエスさまを崇め畏敬の念をいだくのは、その教えの偉大さよりも、徹底した自己犠牲としての愛の、その行為としての死によります。

愛こそ、人に希望と力と慰めと喜びとを与えるものです。愛を無くしたどのような業も、それは空しいものであります。いつまでも人々の中で光り輝きつづけるものは愛だけです。人が一生を終えて、残していけるもの、また、刈り取ることが出来るものは、その人が与えた愛のみです。

劍をさやに納めなさい。父（神）がお与えになった杯は、飲みほさずにいられようか。

— ヨハネ福音書十八章十一節 —

これは、逮捕に來た者達から、イエスさまを護るために、劍で戦おうとした弟子のペテロを戒めてお語りになったイエスの言葉であります。

このお言葉は秘儀に満ちています。人それぞれの人生に、その人なりの苦難が、なぜあるのか、という秘儀。また、その苦難に人はどのように対処すればよいのか、という秘儀がこのお言葉が出てきた根っこに秘められています。

ここで「杯」とあるのは、神から運命を受ける者の象徴として示されているのですが、イエスさまは、ご自分の過酷な十字架架刑という出来事を、「飲みほさずにいられますか」と、ハッキリと申されました。事実、イエスさまは、完全に飲みほされたのです。

そこに秘められた秘儀とは何なのでしょう。別の紙面で頂きたいとおもいますが、今言えますことは、それぞれに出会う苦難には、靈的な意味があり、決して自我の欲にひかれて避けてはならずイエスのごとく、飲みほそうと信仰によって自覺的に受容することです。

神は、あらゆる苦難にさいして私たちを慰めてくださるので、私たちも神からいただくこの慰めによつて、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることが出来ます。

— コリント第二の手紙一章四節 —

苦難を恐れてはなりません。失敗を恐れてはなりません。恐れるべきことは、受けた苦難やおかした失敗を、自分がどのように受けとめるかということです。

苦難を愚痴や恨み心で受け止め、失敗に対して、誰かのせいにしたたり、ひたすら自己弁護の態度で受けるなら、その人は他人の失敗や苦難に対して、助けの手をさしのべ、正しく積極的なアドバイスを与え、ましてや、慰めを与える人になることはできないでしょう。苦難や失敗は、どの人の人生にも付いてまわるものです。苦難や失敗がその人を人間的に成長させるといふことは、分かり切ったことです。しかし、そうなるように苦難と失敗とを受け止めるためには、深い知恵が必要です。

苦難や失敗において、慰めをいただける神を知っている者は、人生の最大の智者であり、人に本当の慰めを与えることが出来る者となるでしょう。

神は、わたしたちの内に住まわせた靈を、ねたむほどに深く愛しておられ、
もつと豊かな恵みをくださる。

— ヤコブの手紙四章五節 —

神は、私たちの内に住まわせた靈性の活性化を求めておいでになります。私たちに肉体が備えられ知恵や感情や意志が与えられているのは、すべて私たちの内に住まわせた靈性が、それらによつて、より豊かに成長するためであります。

靈性の成長とは、自分が神によつて生かされている者であることの素晴らしさを、知恵の働きにより、感情の働きにより、意志の働きにより、そして肉体の働きによつて知ることとあります。ですから、知恵は本来真理に向つており感情は美を望んでおり、意志は善を求めているのです。そして肉体はそれらが調和して働く、個人の場なのであります。

このような知恵と感情と意志の働く姿を「魂」とも「精神」とも申します。ですから、「靈」が豊かになることは、肉体も精神もともに豊かになることです。

肉体だけの人であつてはなりません。精神（魂）だけの人であつてもなりません。靈だけの人であつてもならないでしょう。

イエスは弟子たちに言われた。「今夜、あなたがたは皆わたしにつまづく」

— マタイ福音書二六章三一節 —

権力者にイエスさまが逮捕されたとき、弟子たちは皆逃げてしまいました。「たとえ一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して言いません」と豪語したペテロも、自分の身に災いがおよぼうとしたとき「誓って言う、わたしはそんな人は知らない」と言つて官憲の手から逃れました。

おそらく、弟子の誰一人として師のイエスさまを裏切る自分であるなどとは、思つてもいなかったでしょう。しかし、結果的には自分の思いに反して、裏切ってしまったのです。見事に裏切ってしまった自分自身を見て、弟子たちは愕然としたことでしょう。

「裏切らない自分」である自信からでなく、「裏切ってしまったことでも愛し、助け、容された」自分であることから、キリストの弟子として新しい出発をしたのです。

信仰をもつて生きるとは、聖く生きようとする事ではなく、聖く生きられない自分を、しっかりと抱きかかえて生かして下さるキリストさまと一緒に生きることです。

いと高きところには栄光神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ

— ルカによる福音書二章十四節 —

これは、イエスさまがお生れになったとき、天上に響きわたった天使たちの賛美の言葉であります。

なんと清らかな言葉でしょう。なんと深い安らぎに満ちた言葉でしょう。なんと希望と力とを与えてくれる言葉でしょう。なんと慰めと愛にあふれる言葉でしょう。

真実が失われ、感覚的な欲望と享楽に人々は目をうばわれ、争いと悲惨とがたえることがない私たちの地上に、本当に賛美されるに相応しい真心が、天からこの地上のわたしたちに降りそそがれているという現実を、天使たちは語りかけて下さいます。

神は天にいます、地上を見張っていられるではありません。神は天から、ありったけの祝福の手を私たちのひとりひとりに差し延べておられます。

友よ、天を仰ごう。祝福の御手を生活の足元に見出そう。地上は暗くとも、天から光が惜しみなく降り注がれていることに気づこう。

その平安を頂いて、地上にしつかりと立たしていただく。

わたしは光をつくり、また暗きを創造し、繁栄をつくり、また、わざわいを創造する。わたしは主である、すべてこれらのことをなすものである。

— 旧約聖書 イザヤ書四五章七節 —

本当に畏るべきものを人は知らない。天を仰ぎ、地にひれ伏して嘆き悲しむが、人は本当に畏るべきものを知らない。

富を持つて安心し、着飾ることによって喜ぶ。たらふく食つて安んじ、欲望の海に埋没し己だけを楽しませる。知恵を誇り、権力を求め、地の果てまで欲望の手をのばし、この世の王者たらんと争う。地上のものは畏れを知らぬ人間に汚され、悲惨のなかに殲滅されている。その声なき呻きは地に滲み込み、天に訴えとなつて響く。

人は本当に畏るべきものと向き合わない。その哀れみの手が足下であり、その語りかけが耳元に届いているのに、人は聞く耳を持たず、ただ笑い、ただ嘆くのみで自ら悔い改めることに気づかない。

人は愛を説き、真を求め。しかし、その愛と真とは人間自我による利己的なヒューマニズムから生み出されることによつて、汚される。本当に畏るべきものが言葉を出すとき、天地は震え跡形もなく宇宙に消え去る。創造者、保持者、完成者に栄光あれ。

この地上に住むわたしたちは重荷を負ってうめいておりますが、それは地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲みこまれてしまったために、天から与えられた住みかを上に着たいからです。

— コリント第二の手紙五章四節 —

信仰の人パウロは、自分が聖くなるなどと考えませんでしたし、またそのような努力などしませんでした。

彼は、聖くない自分、また、聖くなれない自分自身に「あいそもくそもつかし」放り出して、そのような汚れた自分の上に、キリストさまによって示していただいた、神さまの絶大な愛という上着を着て、汚い自分自身を包み込んでしまったのです。その時、汚い自分が、神さまの愛の上着の温かさによって、聖められて行く事を心身に確かに感じ、知ったのです。そのとき、「死ぬはずの汚れた自分自身が、永遠の命に飲み込まれてしまう」安心を覚えたのです。

聖書が示す信仰とは、自分が何かをして、その結果自分に得ようとする事ではありません。今のままで、神さまの恵みに包まれている自分に気づき感謝して生きることです。

疲れたもの、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませ
てあげよう。

— マタイ福音書 十一章二八節 —

「智者も善者も浮世を見るに色と金とに皆迷う」。ドキツとする唄です。「人間の心の奥の院を開いてみれば鬼が本尊」。ウムーと唸ってしまふ唄です。

人は欲の為に色々と悩み、争い、欺き、苦しみ、失敗し、あげくの果てに自らに死をもたらしめます。まさに、心の奥の院を開いてみれば鬼が本尊です。どの人にも赤鬼か青鬼かが住んでいます。

世の中には鬼が住んでいる自分であることに居直つてしまふ人がいます。また、自分の内の鬼退治に励む人がいます。さらに、そのような自分に悲しみ絶望してしまふ人がいます。が、イエスさまの示しは、次のように言えます。

鬼の自分のままで、神さまに手を合わせるなら、慈愛に満ちた神さまは、そのまま抱きかかえて清めて下さいますから、その中で感謝して生きなさいと。

鬼である「私」を清めることができるのは「神の愛」だけです。

誰でも、そのまま、わたしのもとに来なさい。しっかりと立たしてあげましようと言われます。

愛はすべてを完全に結ぶ帯です。

— コロサイの信徒への手紙三章十四節 —

「山の頂を耕す一人の農夫があつた。そこを訪れる人々は、山の美しさに感嘆したけれども、その農夫は山の美しさを見ようとしない。なぜなら、彼は山と同化していたからであり、自然を景色として、すなわち鑑賞物としてとらえて、自然の価値をおとしめることをしなかつたからであり、彼は身のまわりの世界と合致していたからである」

自分を少しも変えないままで、相手が自分の氣に入るような姿に変わることを求めるなら、相手を正しく知ることには出来ません。相手を正しく知りたく望むなら、自分を相手に向かつて変えねばなりません。相手が自分に向かつて変わることを求めることを利己的と言うなら、自分が相手に向かつて変わり合致することは愛だと言えます。

互いに利己的であるところから生じて来る事は破滅だけです。しかし、互いに愛が働くところからは、必ず美しい創造的世界が現れて来るでしょう。

すべてそのものの深奥の世界を体得するためには、対象化して見るかぎり、利己主義的独善であることを免れません。相手と自分とを和ませるものは愛だけです。

あなたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。

—ヨハネ福音書十五章一六節—

わたしたちがこの世に生まれて来たのは、決して偶然ではありません。生まれるべくして生まれてきたのです。つまり、この世へ神さまが選び呼び出してくださったのです。そのことが、「わたし」という者が生きていくことの根拠なのです。

人格や人権といったことを尊重しなければならぬと言われますが、その根拠は神さまに選ばれて生かされている人格だからです。

もし、私たちが何かの間違いで偶然にこの世に生まれ出てきた者であるなら、今生きていることの意味が全くありません。何かの間違いでここに在るだけだとすれば、生きねばならない理由などなく、人格の尊厳や人権の大切さの根拠がなくなってしまう。

神さまによってこの世へ選び出された自分であることに気づくとき、生かされている恵みを知り、与えられた命と知恵とを感謝して用いなければという生き方の根本を見いだすのです。神を知るとは、自分が今ここに生きていることの根拠に出会うことでもあります。

わたしの兄弟たち、自分は信仰をもっているという者がいても、行いが伴わなければ、なんの役に立つでしょうか、そのような信仰が、彼を救う事が出来るでしょうか。

— ヤコブの手紙二章一四節 —

「宗教」として「信仰」と「行い」とは同時のこととがらです。

信仰だけ、という宗教は心だけの人間のものであり、行いだけ、という宗教は体だけの人間と同じです。心だけの人が存在しないように、体だけの人もいません。体と心とを同時に働かせて生きているのが人間です。

しかし、体と心とがいつも一つになっているとはかぎりません。体と心とが正反対になつて、心が体の欲に振り回されたり、体が心の欲に振り回されることがありますがどちらも間違つた生き方です。体と心との関係が安定している生き方が安心の生き方です。宗教は、そのような生き方を与えられる、只一つのもので、そのような宗教は本物の宗教です。

体やこの世を蔑み心や来世のことだけを大事とする宗教は間違いです。また、体の満足やこの世だけの幸福を説き、心や来世の事を軽んずる宗教も間違つています。

人の悩みや不安は、体と心、この世と来世、信仰と行いとの間にあるのです。その関わりに正しく答え、人として強く希望に立たしめてくれるものが宗教であります。

みちしるべ文庫 十四

「本物と偽物」

一九九五年七月二十日 第一刷発行

一九九九年六月二十七日 第二刷発行

著者 松下昌義

発行所 左京キリスト教会出版部

京都市左京区下鴨南茶の木町二九
電話(〇七五)七八一―九六四〇